

現地通信

ドンキレク—南タイの回教部落—

矢野 暢

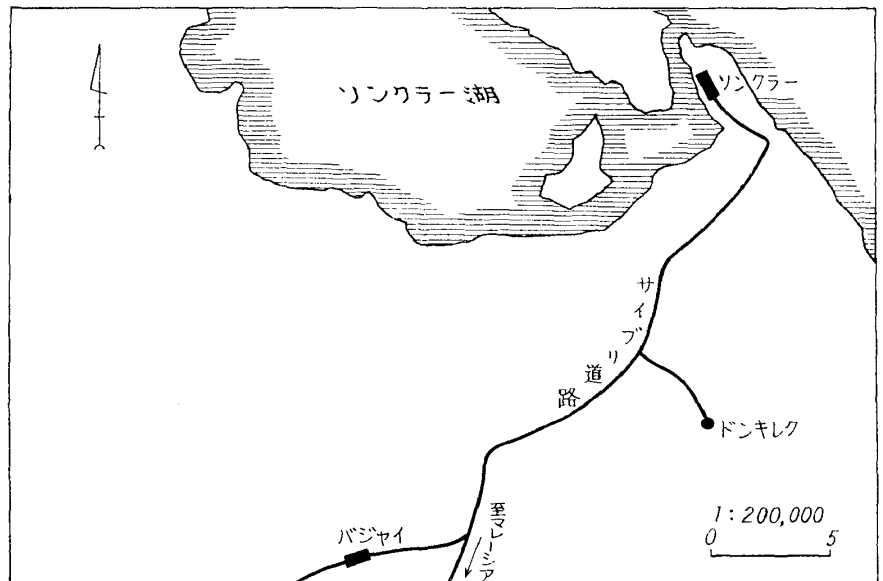
(一)

タイの南部の行政上の中心と見做されているソクラー県は、マレー半島の東海岸のちょうど中ごろに位置している。県庁所在地のソクラーの町は、人口3万余りの小さな町であるが、地形に恵まれた漁港をもち、近隣諸県の漁業の集産地として栄えてきた。港から少し離れて、遠浅の海岸がある。人っ気の少ない美しい砂浜は、この町の名所になっている。町の中央に盛り上がった燈台のある丘からの展望も、その海岸に劣らず、素晴らしい。このソクラーの町を起点に、1本の舗装道路が西に走り、やがて弧を描いて南に折れ、マレーシアに抜けている。ソクラーからマレーシアの国境まで100キロもない。この道路は、マレーシアにあるアロールスターという町の別名をとって、サイブリ道路と呼ばれている。

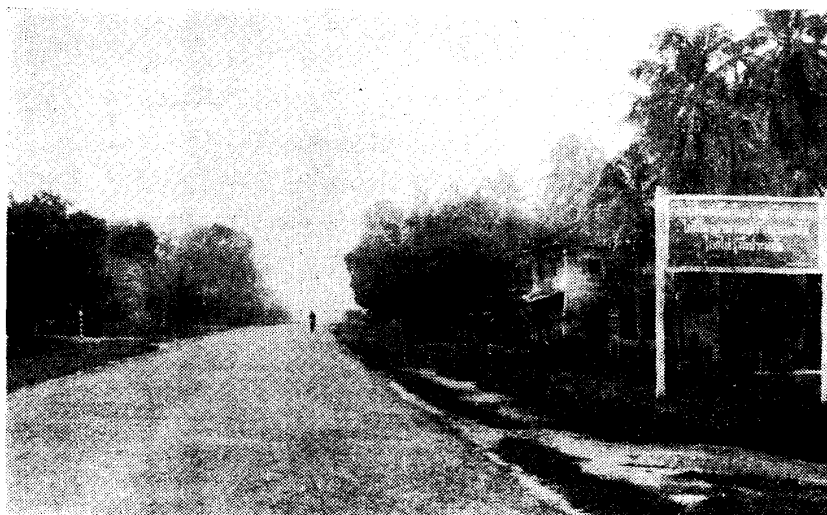
ソクラー県の南に、更に3つの県が連なっており、その先がマレーシアである。タイ人は、ソクラーの南にあるたとえばパタニ県などのことを語るとき、まるで我が家に居候している遠縁のもの話題に触れるようになかば他人行儀に話しをする。理由ははっきりしている。第一、パタニやヤラーでは、主としてマレー語が話され、タイ語が通じないからだ。第二に、そこらに行くと、仏教徒はまばらになり、白い回教寺院がやたらとめだつからでもある。いわば、その地域は、タイの版図の中でありながら、文化的にはもはやタイではなくなってい

る。お隣りのマレーシアの文化圏が国境をこえて、割り込んでいるのである。

話をサイブリ道路にもどそう。二つのバスが辛うじてすれ違える程度のそう広くない道路だが、舗装はすばらしくいい。黒っぽい道が、緑のゴムの樹林のあいだをくねって走っている風景は、ちょっとしたエキゾティシズムを感じさせる。そのゴムの樹林のあいだから、時折およそ4、5米の蛇が這って出て、車にひかれるのも、この地方ならではの光景である。車にひかれた蛇は、誰も触れたがらないので、その場に置き去りになる。次の日には、もうひらく長々とのされてしまっている。車の往きかいは、かなり頻繁なのである。このサイブリ道路の両側には、路上を走る車のきらびやかな近代性と対照的な、まるでひなびた部落がたくさんある。しかし、あるいはゴム園にさえぎられ、あるいは椰子の樹海に埋もれていて、そういう部



ドンキレク部落所在略図



朝まだきのサイブリ道路には、まだ車の影は見えない。この地点から、左に折れて4キロのところ、ドンキレクがある。右に折れると、村市場があり、毎週火曜日に村中の部落から人が群れ集う。

落は、ほとんど道路の上からはかきまみることができない。もしかきまみることができたとする、熱帯風な家屋にかこまれた、回教のマサジットが見えるはずである。

サイブリ道路の両側には、仏教部落にまじってかなりの回教部落がある。ところが、ソクラーを突き抜けるこの道路ぞいの回教部落は、ソクラー以南の居候のような回教徒の社会と少し違っている。なぜならば、ここの回教徒は、日常会話語に、マレイ語ではなくて、ふつうのタイ人なみに、南部方言を話すからだ。タイのことを少しでも知っている人は、「マイペンライ」という言葉を聞いて知っているはずである。この慣用句は、タイ人の国民性を表象するとまでいわれ、タイ語の代表みたいな言葉である。ところが、この言葉が、南タイの田舎では通じないから面白い。南部方言では、「マイプルー」という、風変わりな表現で同じ意味を表わしている。ソクラーの農民は、その言葉を、プルーに独特のアクセントをつけて、元気よく発音する。こういう南部方言を喋る回教徒のことを、土地では「タイ・ケーキ」と呼んでいる。「ケーキ」とは、本来マレイ人ないしインド人をさす特別な言葉だが、南では「ケーキ」というと、もっぱらマレイ人のことであり、同時に回教徒のことでもある。「タイ・ケーキ」とは、マレイの宗教をもったタイ人、という意味である。学者は、これを直訳して、「タイ・イスラム」と呼び、タイの文化をもった回教

徒、という意味を持たせている。土地の呼び方よりもやはり「タイ・イスラム」と呼ぶほうがいいようだ。なぜならば、ここいらの回教徒は、人種的背景は、タイ人ではないからである。南タイをぶらぶら旅行していると、たくさんの回教徒に出会うことができる。仏教徒は、タイ人らしい野暮な容貌をしているのにたいし、回教徒の顔には、どこことなくタイばなれした趣きがある。ソクラーの町の魚市場に、朝の5時半ごろたたずんでいると、朝もやをわけて、小舟が幾種類もの魚を運んで、市場の岸壁に漕ぎ寄せてくる光景を楽しむことができる。そのたくさん

の小舟が、仏教の漁村から来たのか、回教の漁村から来たのか、漕ぎ手の顔や身なりだけで見わけるのは、そう難しいゲームではない。このゲームに一朝興ずると、存外、回教徒が多いのに驚かされる。ちょっと調べてみると、ソクラー県の全人口の2割近くはタイ・イスラムなのだ。タイ・イスラムは、ソクラー県以北にも探すことができる。ソクラーには大きな湖がある。土地の人は「タレサップ」と呼んで自慢にしているが、船で2日ばかりで湖上航海を試みると、思いも掛けぬ美しい風景に出遇すことがあり、実に楽しい。ところが、この湖を北に半日も遡行するとソクラー県のもう一つ北のパタルン県に入ってしまう。パタルン県に入ったあとでも、船の上から、白い回教寺院を遠望できるはずである。「タレサップ」に面したパークパユンという町のミナレットは、ことの他うつくしい。このように、タイ・イスラムは、ソクラー県の独占物ではない。しかし、やはり、マレイ文化圏に直接接しているソクラー地方のタイ・イスラムが、数も多い上に、もっとも典型的なサンプルを提供してくれるように思われる。

(二)

ソクラーの町からサイブリ道路を西に約14キロ余り走ると、左に折れる道がある。道にはわかには悪くなるが、東北タイなどと土質が違い砂が多いので、雨が降ってもそう困ることはない。したたるような緑には

さまれた凸凹の道を南に4キロ行ったところに、きたらしい高床式の建物が乱雑にかたまりあっている1つの集落がある。道の左脇には、ミナレットもない野暮なマサジットがあり、この集落があまり富裕でない回教部落であることがすぐわかる。マサジットのもう1つ左に、ひときわきたない家があり、その床下のにんびりした風貌の中年の男が腕枕をして寝そべっている。そのまわりを家鴨やがちょうや鶏がせわしげに歩きまわっている。その中年の男に名前をきいてみよう。すると、かれは、面倒臭そうに起きあがり、「俺の名はアーマッドで、この部落のプーヤイバーン（部落長）だ」と、ぼそぼそというだろう。アーマッドというタイ語ばなれした名前とプーヤイバーンという生粋のタイ語との取り合わせが面白い。かれに、かさねて奥さんの名前をきくと、「俺には妻は2人いる」と、いい捨てる、のそのそと立ち去ってしまう。このうす汚ない回教部落の名は、ドンキレクという。ドンキレクとは、キレクのある高台という意味である。キレクとは、ある種の鉱物をいうともいい、ある種の木の名であるともいう。

ソクラール県全体でいくつの回教徒の部落（ムバーン）があるか、人にきいてみると、ある人は170あるといい、別の人は140あるという。回教部落といっても、仏教徒がまじって住んでいる部落もあるわけで、純粋な回教部落は140もないかもしれない。ドンキレクは、その点、1軒も仏教徒を含まない純粋の回教部落である。部落長のアーマッドに、初対面の折、部落の戸数をきいたら、284戸あるといった。はじめ私はこれを信じた。しかし、調べてみてわかったことだが、実際は304軒ある。アーマッドの頭には数年前の統計が鍋の底のすすのようにつびりついているのだ。アーマッドの家には、部落の統計を示す書類のようなものはない。第一、あったら不思議である。タイの農村には、びっくりするほど紙切れが見当たらない。チェンマイの農村を1年間調査したあるアメリカ人の学者は、かれの村で新聞紙を見たのは、前後2回きりであった、と、のちに報告している。ドンキレクも似たようなもので、かりに病人に薬をわけてやろうとして、紙切れを出せ、と命ずると、それがない。アーマッドの家に部厚い統計表が積んであったら、いわば奇蹟である。そういう統計表を求めようと思ったら、プーヤイバーンより一段上の位のカムナン（村長）の家に

行かねばならない。ドンキレク部落は、ソクラール県パウォン村に属する。パウォン村のカムナンは、この土地の大ボスである。かれの家には確かに村の戸別リストがあった。部落毎に厚くとじてあった。ところが、これも、つかいものにはならなかった。なぜなら、はじめの20枚余りとおわりの10数枚がひきちぎれていて、どこかに失せていたからだ。マレイ人みたいな顔付きをしていばかりかっているカムナンに、そのことを告げると、標準語で「マイペンライ」といった。しかし、そのアクセントには南部訛りが強かった。カムナンやプーヤイバーンが、このルーズさで村を支配しているとしたら、村民は、これに輪をかけてのにんびりしているのだな、と思え、愉快になった。

304戸というと、かなり大きな部落だといえよう。304という数字は、私の心にとって、かなりの負担となった。ふつう、人類学者が、一年間の調査のために村落を選ぶばあい、200戸以下の村を選ぶとされてい



ソクラールの回教徒の老人。かれの顔が示すように、タイ・イスラムは人種的にふつうのタイ人とは別の血筋に属するようだ。この老人は、若い頃メッカに行ったという。メッカ旅行の思い出の記憶は、いまでも確かである。



ドンキレクの金曜日の礼拝。男達は、皆思い思いの恰好をしているが、頭を布でおおい、清潔なシャツとパトウンをはき、そして事前に水浴びして身体を清めている点では皆一様である。

る。しかし、私は、ドンキレクを調査村に選ぶことに、それほどちゅうちょは覚えなかった。私が、最初、ドンキレクに関心を寄せた主たる理由の一つは、周囲を仏教部落に囲まれて孤立しているという事実であった。ドンキレクが4つの仏教部落に囲まれている配置は、異質社会の接触という観点から、ひじょうに魅力に富んでいた。そして、ドンキレクは、もう一つ魅力を持っている。ドンキレクにはじめてはいって行くと、マサジットとアーマッドの家のある、ごちゃごちゃした集落に行きつくわけだが、はじめは、うっかり、これがドンキレクのすべてだと思ってしまう。ところが、ここには、全体の3分の1余りが寄り集まっているだけで、残りの200軒は4つの集落にわかれて、遠く離れて散らばっているのである。つまり、ドンキレクは、5つの集落からできあがっているわけだ。家々の集落のことを、タイ語では「クルム」という。ドンキレクの5つのクルムはそれぞれ、冗長で記憶しにくい名前をもっている。私は、自分の日記などには、各クルムに勝手にあだ名をつけて、それで記録することになっている。一番小さいクルムには、家は16軒しかない。このクルムは部落の一番南にあり、

もっとも開けてない環境にある。私は、このクルムを伊賀部落と呼んでいる。マサジットやアーマッドの家がある中央のごちゃごちゃした集落は、江戸部落と呼んでいる。伊賀部落と江戸部落とは、距離で1キロも離れていないのに、住民の民度や生活様式その他に、ひどい差があるのは面白い。要するに、ドンキレクが5つのクルムをもち、しかも、クルムがそれぞれ特性を備えていて、各クルム間に共通点と相異点とがあるという事実は、ドンキレクというごく狭い社会のなかで、はや比較研究ができることを意味し、それが私を少なからず喜ばせたのだった。

(三)

私は、サイブリ道路からドンキレクへの道が別れ折れる地点に、1軒家を借りて住んでいる。そして、ほとんど毎日、早朝ドンキレクに入り、夕暮の祈禱がおわる頃まで、ドンキレクの住民とまじわっている。数ヶ月前のことが思い出される。私がドンキレク調査をはじめて数日もたたないうちに、1人の老人が「バタヤク」で死んだ。そのとき、私は、心臓麻痺で死のうがポックリ病で死のうが、要するに急死のばあいには、「バタヤク」という言葉が用いられることを知った。これはじつは、破傷風を意味する。しかし、その



数ヶ月前のある金曜日、家の引越しがあった。礼拝姿の男衆たちがこぞって家を担ぐのを手伝った。

老人の死は明らかに心臓病によるものだった。私は、幸運にも、老人を死が襲った直後にその家に来あわせたので、死体の傍に坐り込むことができた。私は、生まれてはじめてイスラムの葬式を目撃した。本の筋書き通りに、文字通りイスラム式に、死体は親類縁者の肩に担がれて、墓地に運ばれ、埋葬され、またたくまに、葬式はおわった。その日、私は、ドンキレクの住民のなかに、かなり融け込むことに成功した。これに続いて、もう一つの幸運が私を待っていた。老人の死の数日後、あるクルムから別のクルムへ、家の引越しがおこなわれた。ドンキレクでは、家の引越しは、文字通り、家ごとかついで、別の場所に運んで行く作業を意味する。住民の集団作業の典型的な事例であるといえようが、毎年見られるわけではない。引越しは、金曜日におこなわれた。回教部落である以上、ドンキレクでは、金曜日の正午過ぎに、集団礼拝がなされ、江戸部落のマサジットに、部落中の男衆が集まってくる。私は、毎金曜日の昼下がり、マサジットの入口に立って、かれらの祈禱の一部始終を観察する。回教徒の礼拝には、世俗ばなれした音楽性と没我の演技があり、みるだに美しい光景であると思う。ドンキレクでは、礼拝のまえに、「プラチュム」という時間がもたれ、部落民への伝達事項が、アーマッドないし

トイマム（導師）のおごそかな声で、男衆に読み上げられる。「プラチュム」とは、会議、の意味である。その日のプラチュムでは、トイマムが、家の引越しの希望があるから、礼拝後全員担ぎに行くように、と男衆に命じた。礼拝がすむと、男衆たちは、礼拝用の清潔な衣裳のまま、引越しの現場に赴いた。そこから家を担ぎ、約1キロ離れた地点まで運んで行った。家は、ゆっくりゆっくり動いて行った。私も、かれらにまじり、家を担ぐ仲間に加わった。150人程で押いていても、1軒の家は、私の肩に喰い入るように重かった。しかし、その1キロの長い道程のあいだに、私は、ドンキレクの住民と、より深く融和することに成功したのだった。

私の調査は、このような幸運からはじまった。そして、ドンキレクは、いつしか、私にとってすばらしいラボラトリーになった。

現在、ドンキレクは田植が完了したところで、いま西瓜植えの最中である。ソクラー地方は、まだ雨季が終らない。毎日の雨と、目前に迫った断食月とが、ドンキレクの住民をせわしく仕事に駆りたてている。かれらのせわしい動きは、私をも忙しくすることはいうまでもない。それがまた、楽しい。

(12月27日・ソクラー県パウオン村にて)

タイ・カセツェート大学から

福井捷朗

現在タイ国には7つの大学がある。すなわち、唯一の総合大学であるチュラロンコン大学、農、法、医、芸術の4つの単科大学、それに昨年発足したばかりのチェンマイ、コンケンの二地方大学である。これらは全て国立大学で、私立大学設立の噂は聞いているが、まだ実現は大分先のこのようである。

「カセツェート」というのはタイ語で「農業」という意味で、したがって、「農科大学」というのが翻訳名になる。その略史を第1図にまとめてみた。現在タイの大学はすべて首相直下の「Office of Prime Minister」の下にあるが、たとえばカセツェート大

学の場合には、1962年までは農務省の管轄内にあった。現在直接には、大学は大学管理委員会によって管理されているが、その委員の顔触れは首相を議長、学長を副議長とし、6人の学部長、事務局長、それにこの委員会の推せんによって国王が任命する委員など合計30名からなっている。

カセツェート大学は図に見られる通り、現在6学部、41学科からなる。各学部の学科編成は省略するが、その特徴は、たとえば農学部には生物、化学科や、英語学科があったり、灌漑工学部に数学科があったりすることである。しかし、これらは来年度からあら